

# 三ツ島遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う  
門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書

1997年3月31日

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

# 三ツ島遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う

門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書

1997年3月31日

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

# 序 文

今から約5000年前、北河内地域の南部や中河内地域は、「河内湾」と呼ばれる、上町台地と生駒山地に挟まれた海面が広がっておりました。河内湾は大和川が運ぶ土砂により、少しずつ埋まり「河内湖」となり、さらに完全に埋まりきって陸地化し、現在の「河内平野」が形成されました。しかし、三ツ島遺跡の所在する門真市やその周辺の大東市、東大阪市北部は陸地化するのが最も遅く、江戸時代のはじめ頃にも河内湖の痕跡である新開池や深野池という巨大な池が存在しておりました。

三ツ島遺跡の周辺は、河内平野でも最も湿潤な場所に当たり、台地や丘陵に比べると生活の場としての条件が十分に揃った地域とは決して言うことはできません。

しかし、今回の調査で検出した蓮根島の痕跡が示すように、この地に暮らした人々は、悪い立地状況を逆に利用する事を考え、知恵と努力によって不安定な土地を最大限に利用してきました。自然と共生するとともに、一方で自然を克服しながら懸命に生きてきたのです。かれらが生業とした蓮根栽培は、河内を代表とする農作物となり、昭和30年代まで「蓮根掘り」は河内の景観の一部となっていました。

今回の調査では、三ツ島の地に小さいながらトレンチを入れたことで、この地域の土地利用の歴史の一端を明らかにできたと言えます。さらに周辺地域で、調査が進展することにより、従来あまり考古資料が蓄積されていなかった門真市南部の様相も明らかになるものと信じております。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援いただいた関係機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思っております。

平成9年3月31日

財団法人 大阪府文化財調査研究センター  
理事長 坪井清足

# 例 言

1. 本書は、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所による一般国道1号バイパス（大阪北道路）の一部、府道深野南寺方大阪線～大阪中央環状線間における道路整備に伴い、門真市三ツ島地先で実施した埋蔵文化財確認調査報告書である。
2. 調査は、財団法人大阪府文化財調査研究センターが、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所から委託を受けて実施した。
3. 調査に要した費用は29,618,680円であり、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所が負担した。
4. 調査期間は1996年（平成8）12月26日～1997年（平成9）3月31日であり、現地調査は1997年（平成9）1月27日～3月25日の期間で実施した。
5. 本調査は、調査部長井藤徹、中部調査事務所長赤木克視、整理係長村上年生のもと、技師市本芳三・若林邦彦が担当した。
6. 本書の編集・執筆は調査担当者がこれに当たった。

# 目 次

序 文

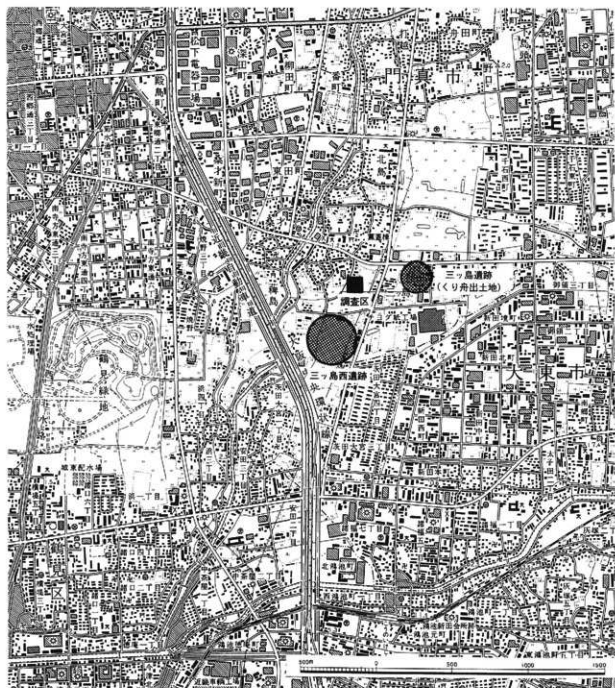
例 言

第1章 調査に至る経過 .....	1
第2章 位置と環境 .....	3
第3章 調査の成果 .....	6
1. 96-1 トレンチ	
2. 96-2 トレンチ	
3. 96-3 トレンチ	
4. 96-4 トレンチ	
第4章 まとめ .....	10

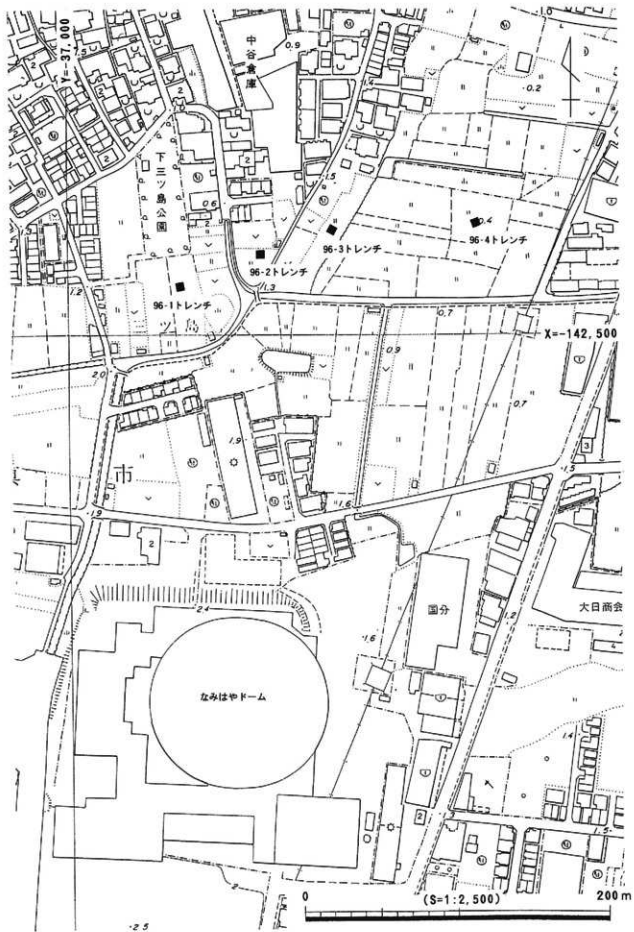
## 第1章 調査に至る経過

今回の調査は、京阪地域の交通需要と関西文化学術研究都市へのアクセスとして現在建設が計画されている日本道路公団による第二京阪道路とそれに併行して建設される一般国道1号バイパス（大阪北道路）の予定地の内、後者の部分の一部の埋蔵文化財の包蔵の有無を確認するためのものである。

大阪中央環状線と府道深野南寺方大阪線との間の一般国道1号バイパス予定地の一部に4か所のトレンチ（4m×4m）を設定した。現地調査は、当該トレンチの土留め用の鋼矢板を打ち込み、現地表面から4mの深さまで掘削し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査面積は全体で64㎡である。



第1図 調査地の位置



第2図 トレンチの位置

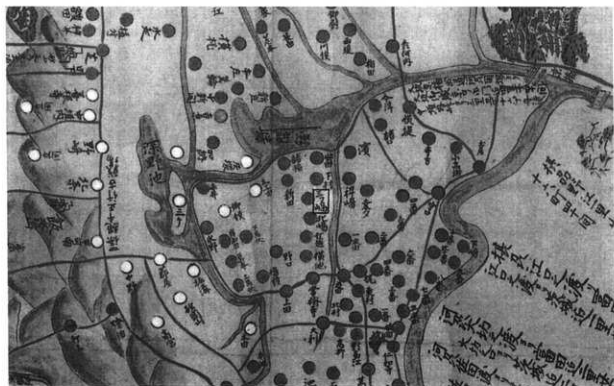
## 第2章 位置と環境

門真市三ツ島の地は、元来、河内湖の痕跡である新開池の北側に当たり、河内平野において最も標高の低い場所に位置する。このため、他村からの排水が集まり、これが人々の生活を大きく規制してきた。三ツ島の樋口家文書には、1605年（慶長10）に樋口兼保が祖先からの聞伝えを記したという文書があり、次のようにみえる。

今間、三ツ島村と云其古しつを答るに、我伝へ聞、むかしは、河内の国八箇庄とて、一面の大浪中にて、所々小島ありし其一つなりしとかや、若し兩三日に至る時は、庄内洪水し、田作耕作等も甚稀なり、人家ここに三軒、かしこに五軒、人皆常に漁を業とし、衣食どころにたらず、灯し火なをかたく、月にかこち、闇をかなしむとかや、然るに我が大祖氏事を計るに、土をもって高き灯籠台を築き、毎夜これに火を揚げる、此光りにしたがって小鮮魚おのづから浪岸に群り来る

このように三ツ島は水との深い関わりがある地であり、生産活動や日常生活の中で舟を活用することが多かったようである。1962年（昭和37）には、三ツ島の工場建設予定地からくり舟が発見され、話題となった。当時の新聞の見出しには「わが国最古のくり舟」とか、「奈良時代？の丸木舟」、「古代の丸木舟そっくり発掘」などの文字が踊っている。このくり舟が作られた年代は明らかにすることはできないが、この地域の人々が古くから集中して押し寄せる水との関わりの中で積極的に生きてきたことの痕跡であろう。

今回の調査区一帯において近年まで運根栽培が行われていたことは、後述する第3章の調査成果から



第3図 河内国絵図にみる三ツ島



第4図 明治前期の三ツ島遺跡の景観



明らかである。まさに河内平野の低湿地部に相応しい農作物である。河内の蓮根は『延喜式』に河内国の貢進物にあげられており、古代からその栽培が確認できる。江戸時代には領主から「蓮年貢」がかけられているように、この地域を代表する生産物の一つとなっており、この地域で生産されるものは「河内蓮根」と呼ばれ蓮根の代名詞となっていた。しかし、蓮根は“穴があく”として大阪商人には好まれなかったが、明治の末には大阪の天満市場や木津市場に進出し、その後新品種の導入を計り、著しく需要が増加するとともに、耕作面積も増大した。蓮根畠は高度経済成長期以前のこの地域の景観を構成する重要な要素であったのである。1960年代以降進行した大阪の都市化の波は、次第にこの地域にも押し寄せ、蓮根畠も工場や宅地として開発されていったが、三ツ島一帯は最近まで盛んに蓮根の生産が行われており、河内の低湿地の風景を残していた。

蓮根は4月頃に作付けを行い、8月に花を出荷するが、蓮根自体の収穫は11月頃から3月頃まで続く。蓮根掘りは、地下茎が横に伸びているため、土を除去する作業は重労働で、かつては「沈み掘り」といって胸まで泥につかり、寒風の中作業することも多かった。今回の調査成果からも、この蓮根掘りの実態を知ることができる。

今回の調査区の周辺において発掘調査が実施された地点は少なく、地域の歴史を考古学により把握することは困難な現状である。先述したくり舟土地は当該調査区の東方300mに位置し、大規模スポーツ施設「なみはやドーム」の建設に発掘調査が実施された三ツ島西遺跡は、南西方300mに当たる。三ツ島西遺跡では、近代に瓦生産に伴う粘土採掘坑などが検出されたのみであるが、洪水により流入した土砂中からまとめて出土した縄文晩期（滋賀里Ⅰ式ないしⅡ式）の土器片から、付近にその時期の遺跡の存在が予想されている。

#### ＜参考文献＞

- 『門真市史』第1巻 門真市 1988年  
『門真市史』第3巻 門真市 1997年  
橋本高明『三ツ島西遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会 1992年  
『大阪府の地名Ⅱ』（日本歴史地名大系28） 平凡社 1986年

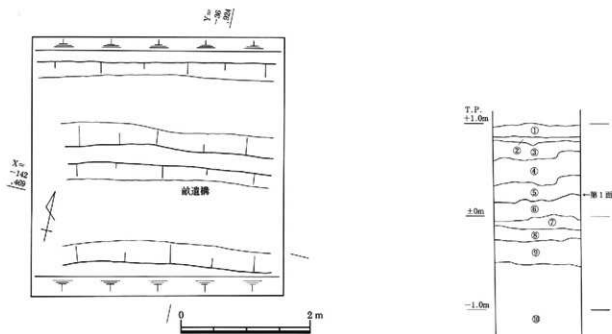
### 第3章 調査の成果

#### 1. 96-1 トレンチ

現地表面はT.P.+1.0mを測る。第1層は現耕作土、第2層は床土であり、第3層は褐灰色粘土と灰黄褐色粘土の攪拌層であり、旧耕作土と考えられる。第4層の灰黄褐色シルトを除去すると東西方向に伸びる褐灰色粘土で構成された畝が3条検出された。底辺幅0.8~0.9m、高さ約0.3mを測る。この遺構は近世から現代の所産と推定される。

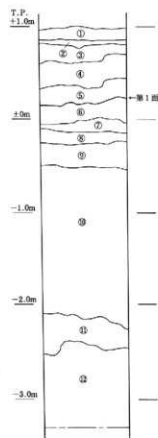
第6層は第1面のベース層であり、7・8層ともに褐灰色から黄灰色の粘土であり、蓮根島の耕作粘土層と考えられる。第2・4・6層からは近世から近代の碗、瓦が出土した。

第9層以下、T.P.-0.3mから下層は青灰色シルトが続き、干潟の潮間帯の堆積と考えられる。下層ほど粘土質である。貝類の生物攪乱による管状の穴が観察でき、シルトが堆積している、第9層より下層からは土器等の遺物は出土していないが、第12層から魚類の骨が1点出土した。



第5図 96-1 トレンチ第1面平面図

- ① 黄灰色粘質シルト (現耕作土)
- ② 泥がひき混じった黄褐色粘質シルト (現床土)
- ③ 褐灰色粘土・灰黄褐色粘土攪拌層 (旧耕作土)
- ④ 灰黄褐色シルト
- ⑤ 褐灰色粘土 (第1条畝遺構断面)
- ⑥ 褐灰色粘土
- ⑦ 黄灰色シルト質粘土
- ⑧ 黄灰色シルト質粘土
- ⑨ 黄灰色シルト (黄灰色シルト質粘土ラミネーションに入る・植物遺体混)
- ⑩ 青灰色シルト (明黄灰色シルトが貝殻・植物遺体混)
- ⑪ 黄灰色粘質シルト (明黄灰色シルトが貝殻・植物遺体混)
- ⑫ 青灰色粘質シルト (植物遺体少量混)

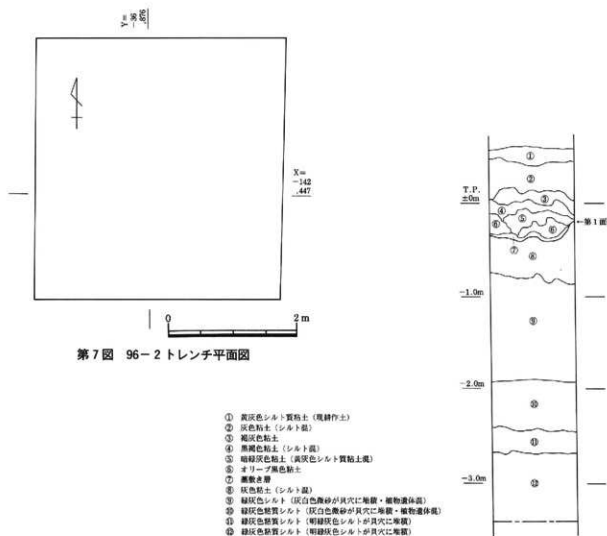


第6図 96-1 トレンチ断面柱状図

## 2. 96-2 トレンチ

現地表面はT.P.+0.6mを測る。第1層の現耕作土を除去すると、T.P.+0.1~-0.8mにかけて蓮根畚の耕作土と考えられる第2~8層とした黒褐色から暗緑灰色の粘土層が堆積している。粘土層途中のT.P.-0.4mからは一面に藁敷きが検出された(第1面)。基本的に東西方向に敷かれているが、一部直交した方向に敷かれた部分もある。藁の敷かれたベース面は波打っている。近・現代の遺構と考えられる。第2~8層からは近世から現代の瓦、染付皿、摺鉢が出土した。

第9層以下、T.P.-0.8mから下層は緑灰色から青灰色のシルトが続き、干潟の潮間帯の堆積と考えられる。下層ほど粘土質である。貝類の生物攪乱による管状の穴が観察でき、シルトが堆積している。第9層より下層からは土器等の遺物は出土していないが、第10~12層にかけてハイガイ(内海に棲息)等の二枚貝の他、巻貝であるツメタガイ(浅海種)が出土した。また第12層のT.P.-3.0m付近から自然木が出土しており、放射性炭素年代測定を実施することにより、干潟の形成時期が明らかになるものと思われる。



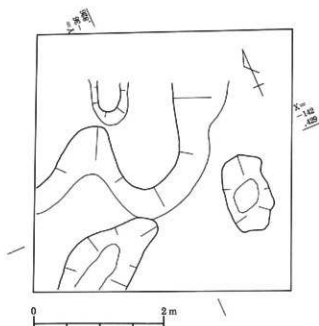
- ① 黄灰色シルト質粘土(現耕作土)
- ② 灰色粘土(シルト混)
- ③ 黄灰色粘土
- ④ 黒褐色粘土(シルト混)
- ⑤ 暗緑灰色粘土(黄灰色シルト質粘土混)
- ⑥ オリーブ黒色粘土
- ⑦ 藁敷き層
- ⑧ 灰色粘土(シルト混)
- ⑨ 緑灰色シルト(灰白色黄砂が貝穴に堆積・植物遺体混)
- ⑩ 緑灰色粘質シルト(灰白色黄砂が貝穴に堆積・植物遺体混)
- ⑪ 緑灰色粘質シルト(明緑灰色シルトが貝穴に堆積)
- ⑫ 緑灰色粘質シルト(明緑灰色シルトが貝穴に堆積)

第8図 96-2 トレンチ断面柱状図

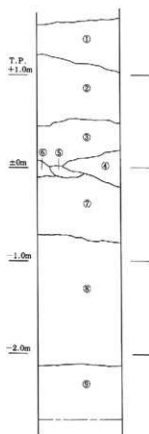
### 3. 96-3 トレンチ

現地表面はT.P.+1.5mを測る。第1・2層の現耕作土を除去すると、T.P.+0.5~-0.8mにかけて蓮根畠の耕作土と考えられる第3~8層とした暗青灰色からオリーブ灰色の粘土層が堆積している。この途中のT.P.±0m付近に灰白色細砂(第4・6層)が挟れており、除去面はやや凹凸が見られる(第1面)。第3~7層からは近世から現代の染付碗、摺鉢、瓦の他、第4層からは12世紀後半から13世紀前葉の瓦器碗片が1点見られた。

第8層以下、T.P.-0.8mから下層は緑灰色から青灰色のシルトが続き、干潟の潮間帯の堆積と考えられる。下層ほど粘土質である。貝類の生物攪乱による管状の穴が観察でき、シルトが堆積している。第8層より下層からは土器等の遺物は出土していない。第8・9層のT.P.-2.0m前後からハイガイ等の二枚貝、鳥のものと考えられる小動物骨が出土した。



第9図 96-3 トレンチ第1面平面図



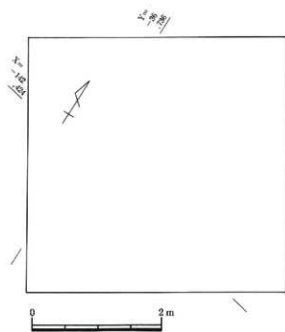
- ① 黄灰色粘質シルト(埋盛土)
- ② 青灰色粘土(磯浜・埋盛土)
- ③ 暗青灰色粘土
- ④ 灰白色細砂
- ⑤ 灰色粘土
- ⑥ 灰白色細砂
- ⑦ 灰色粘土(植物遺体混)
- ⑧ 暗緑灰色粘質シルト(明緑灰色シルトが貝穴に堆積・植物遺体混)
- ⑨ 暗緑灰色シルト質粘土(植物遺体混)

第10図 96-3 トレンチ断面柱状図

#### 4. 96-4 トレンチ

現地表面はT.P.+0.6mを測る。T.P.+0.6~-0.3mにかけて蓮根島の耕作土と考えられる第1~3層とした暗青灰色から灰黄褐色の粘土層が堆積している。第2層からは中世から現代の土器片が出土した。

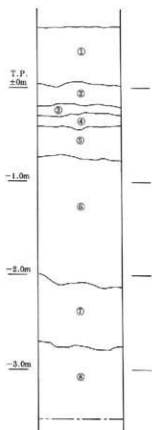
第4層以下、T.P.-0.3mから下層は明オリブ灰色から緑灰色・青灰色のシルトが続き、干潟の潮間帯の堆積と考えられる。下層ほど粘土質である。貝類の生物攪乱による管状の穴が観察でき、シルトが堆積している。第4層より下層からは土器等の遺物は出土していない。第7・8層のT.P.-2.5m前後からハイガイ等の二枚貝が出土した。



第11図 96-4 トレンチ平面図

- ① 暗青灰色粘土
- ② 灰黄褐色粘土
- ③ 灰黄褐色粘土 (兼砂混)
- ④ 明オリブ灰色塵砂 (灰色粘質シルト混)
- ⑤ 青灰色塵砂
- ⑥ 暗緑灰色シルト (兼砂混)
- ⑦ オリーブ黑色粘質シルト (青灰色シルトが貝穴に充填・植物遺体混)
- ⑧ 暗緑灰色シルト質粘土 (青灰色シルトが貝穴に充填・植物遺体少量混)

第12図 96-4 トレンチ断面柱状図

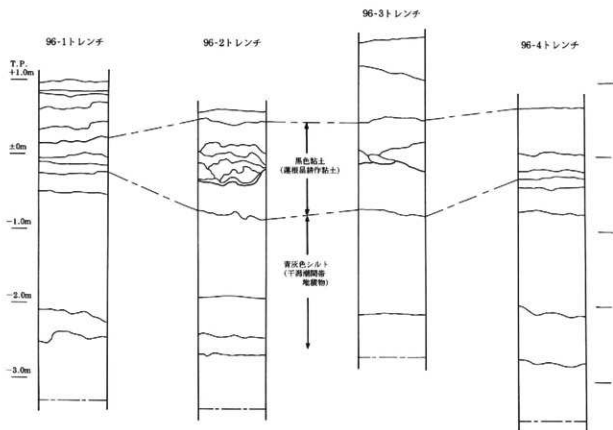


## 第4章 ま と め

今回の調査では、調査範囲に4×4mのトレンチを4か所設置し、鋼矢板を打ち込んだ上で、現地表面から4mの深さまで掘削し、遺構・遺物の有無について確認を行った。

96-1トレンチでは近世から現代の所産と考えられる畝遺構が検出され、他のトレンチでは自然地形の一部を検出した。

4か所のトレンチで確認できた堆積層は、基本的上層より現耕作土、蓮根畝耕作粘土、干潟堆積層のシルトである。現耕作土、蓮根畝耕作粘土からは中世から現代の遺物が極少量出土した。干潟堆積のシルトからは遺物の出土は見られなかったが、貝類、小動物骨、自然木などを検出した。干潟の形成年代は、自然木を放射線炭素による年代測定によりある程度特定することが可能であると考えられる。今後の課題である。



第13図 土層の対応関係



調査地遠景



調査地付近の風景



調査風景



96-1 トレンチ  
第1面 畝状遺構



96-1 トレンチ  
畝状遺構断面



96-1 トレンチ  
第6～8層付近断面





96-2 トレンチ  
第1面 藁敷き遺構



96-2 トレンチ  
藁敷き遺構 (細部)



96-2 トレンチ  
第9～12層 貝類の生物攪乱



96-3 トレンチ  
第1面 自然地形



96-4 トレンチ  
第6～8層断面



96-4 トレンチ  
第7層出土 二枚貝

## 報告書抄録

ふりがな	みつしまいせき							
書名	三ツ島遺跡							
副書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	村上年生・市本芳三・若林邦彦							
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みつしまいせき 三ツ島遺跡	おおいまかし 大阪府門真市 みつしまいせき 三ツ島地先	27223		34° 42' 54"	135° 35' 51"	1996.12.26   1997.03.31	64㎡	国道バイパス建設 に伴う埋蔵文化財 確認調査
				X	Y			
				-142,469   -142,424	-36,736   -36,924			
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三ツ島遺跡		近世～近代	耕作地	特になし		蓮根島に関するもの		
		縄文時代以前	干潟堆積層	特になし		ハイガイなどの貝類、魚鳥などの骨出土		

### 三ツ島遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う  
門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書

発行年 1997年3月31日

発行所 財団法人 大阪府文化財調査研究センター  
大阪府城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階  
☎06-934-6651

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府東成区深江南2丁目6-8  
☎06-976-8765

